



上—マリア・アイヒホルン《5週間、25日、175時間》(2016)の展示風景
Courtesy of the artist
Photo by Andy Keate
下—パブロ・ブロンスタイン
古代の舞台設定における歴史的舞踊 2016
Photo by BrothertonLock
© Pablo Bronstein



アルセロール・ミッタル・オービットに設置された、カールステン・ヘラー《ザ・スライド》(2016)
Courtesy of ArcelorMittal Orbit

London

ロンドン

伊東豊子=文

Text by Toyoko Ito
(Art journalist/ fogless)

「ザ・スライド」

The Slide
アルセロール・ミッタル・オービット
ArcelorMittal Orbit
* 3 Thornton Street, Queen Elizabeth Olympic Park, Stratford, London

マリア・アイヒホルン

「5週間、25日、175時間」展
Maria Eichhorn: 5 weeks, 25 days, 175 hours
4月23日～5月29日
チセンハール・ギャラリー
Chisenhale Gallery
* 64 Chisenhale Road, London

パブロ・ブロンスタイン

「古代の舞台設定で歴史的な踊りを」
Pablo Bronstein: Historical Dances in an Antique Setting
4月26日～10月9日
テート・ブリテン
Tate Britain
* Millbank, London
Tel. +44-20-7887-8888
10:00～18:00

フェミニズムから移民・難民問題まで 40年の時間を超越するモナ・ハトゥーム展

話題性のある発表や一風変わった展示が目立つ春のロンドン。カールステン・ヘラーの世界最長のチューブ型「滑り台」が装備されることになった、アニッシュ・カプーアの五輪タワーがそのひとつ。テート・ブリテンのホールで、ダンサー3人が毎日6時間バロック・ダンスを披露する、パブロ・ブロンスタインのパフォーマンスもまた珍奇な企画だ。

一方、これらの娯楽性、存在感の強い企画とは対比的に、気鋭な若手を好むチセンハール・ギャラリーでは、期間中ギャラリーを「閉める」新展示が始まり、話題を呼んでいる。ドイツ人作家マリア・アイヒホルンの「5週間、25日、175時間」は、シンポジウム1日と門に貼られた告知文のみの異色な構成。会期中、ギャラリーのスタッフも働いてはいけないという徹底ぶりだ。その背後には、「形あるものを産まなければ美術とは言えないのだろう

か」という問題提起が潜むが、非展示行為を展示として発表するその大胆な発想が物議を醸している。

そんなアクの強い企画が目立つなか、深い考察で突出しているのが、英国の美術館での本格的個展は意外にも初めてとなる、テート・モダンのモナ・ハトゥームの展覧会だ。1995年の「ターナー賞」展で評判となった、内視鏡で自分の体内を撮影した《見知らぬ身体》(1994)や、家具や調理器具を舞台セットのように並べて電流を通した《家庭に縛られて》(2000)など、盛大かつ代表的なインスタレーションがそりい華やか。またこれらを捕うように、初期のパフォーマンス映像や写真、ドローイングなど、あまり知られていない作品群も充実し新鮮だ。

本展の特に評価すべき点が、40年分の作品群を、時系列を若干崩しながら異種な作品を同居させ、ハトゥームの多